

A・M・ホカート『王権』“Kingship”Oxford University Press,1927 橋本和也訳

その 1

【著者紹介】

1883年 ベルギーのブリュッセルに生まれ、1939年死去。享年 55 歳。
象徴人類学、構造人類学の先駆者とされる。オックスフォード大学で学び、ソロモン・
フィジー・ロトウマ・サモア・ウォレス・トンガ諸島の調査を行なう。彼の研究は死後
オックスフォード大学の社会人類学者たちによって、遺作が続けて出版されることにより
再評価され広く知られるようになった。“Caste” (1950)、“The Lifegiving Myth” (1952)
“The Northern States Fiji” (1952)、“Social Origins” (1954) 等がある。

【著書構成】

はじめに

第 1 章 プロローグ

第 2 章 王の神性

第 3 章 神よ、王を救い給え！

第 4 章 療癒^{るいれき}

第 5 章 王の正義

第 6 章 神饌

第 7 章 戴冠式

第 8 章 結婚式

第 9 章 役職者

第 10 章 司祭

第 11 章 敬意の複数形

第 12 章 イニシエーション

第 13 章 神の徴し

第 14 章 塚

第 15 章 神話と築山

第 16 章 天地創造

第 17 章 ヨシュア

第 18 章 神々

第 19 章 エピローグ

【著書概要】

本書は、東はフィジーから、東南アジア、インド、エジプト、ヨーロッパに及ぶ王権の事例を幅広く扱いながら、比較言語学がインド＝ヨーロッパ母語の祖型を探り出した方法を借りて、独自に比較民俗学(または歴史学)的方法を確立し、「王権」及びその即位式の祖型を探る画期的な試みで、最終的には本書で扱った地域が「王権」に関して一つの文化圏を形成していることを証明しようとする知的冒険の試みでもある、と訳者あとがきにある。(この翻訳は1969年版に依る。)

今回は第1章から第5章までを、次回は第6章から第13章、最終回は残りを紹介する予定である。

はじめに において、本書は「言語研究の分野で大きな成果を収めている方法論を、慣習と信仰の分野に適用しようとする試みである」と断り、この種の最初の試みは必然的に洗練さを欠くと思うが批判を恐れず公表すると決意を述べている。

その視点は、南方のさまざまな人々との長期にわたる親交から得た成果と、当然のことだが、あらゆる信仰を真摯に考察するという基本的な姿勢を土台にするとする。

第1章 プロローグにおいて、本書は「**聖なる王権**」という言葉が最も適切に表している思考の体系の発展と派生の筋道を、広い枠組みの中で提示することを目的とし、検討するあらゆる形態が共通の起源を持っているか否かを最終的には決定するが、事例自身の持つ特徴が共通起源を持つかどうかは自然に導かれるだろうと述べる。

水中に生息するある哺乳類と魚類には類似する事例はあるが、それは共通の起源に由来するものではなく、異なった起源をもつものが同一の環境に適応した結果同じ形態をとる収斂という現象に由来している。同じ属の同じ種は一つの共通した祖先から派生しているが、時折類似の度合いが非常に離れている場合があり、表面的に観察しただけでは両者の関係を知ることは出来ないし、また逆に非常に離れている種同士でも同じ環境の下にあれば、時に収斂の度合いが著しくなって同種のもの以上に似てくることがある。科学的訓練を受けていない者は欺かれるが、研究者は類似した形態の背後には全く異なったプロセスを持つ構造を発見するのである。この収斂は慣習の領域でも疑いなく見られる現象であると言いき、収斂の事例として言語分野、比較建築学、フィジーにおける一宗教者の考えをあげている。派生という逆の過程については次章以降で、習慣と信仰に関する派生の豊富な事例を扱うとし、習慣を解剖する作業は全面的に其々の構造を解明するので、最終的には殆どの事例がいくつかの共通する起源を持っていることが判明するだろうと述べる。

第2章 王の神性 では、必ずしも最も始源の信仰であるという積りは無いが、現在我々が知りうる最も初期の宗教は、王の神性に対する信仰で、初期の記録をみると人は神とその地上での代理である王を崇拝していた様に思えるという。現在の知識では神々への崇拝が王への崇拝に先行していたとの主張は出来ず、多分どんな王も神なしでは、またどんな

神も王なしでは存在しなかったであろうが、この問題については聖なる王権の起源が解明された時はっきりするであろう、記録で辿り得る限りでは神々を表象する王は、歴史の始めから存在したという事実を知るのみであるといい、以下の数々の事例を述べる。

(エジプト・古代シュメル・ヒッタイト・ヘブライ・ギリシア・古代ローマ・古代ドイツ・インド・セイロン・マレイ・日本・太平洋諸島～サンドウィッチ島、サモア・サモア北方のトケラウ群島、トンガ、ニュージーランドのマリオ族、フィジーの北西にあるポリネシアのフトゥナ島、タヒチ・北アメリカのナッチェ族・南アメリカのインカ族・古代エジプト人の影響を受けたナイル川上流域のディンカ族、シリユック族、ウガンダの人々の観念)

エジプトについてはG・フォウカート氏の「究極的に辿り着くところには、専ら王を神々と同一視する君主制の観念がある」と、J・H・ブリステッド氏の「王とは塗油式の日若い王子を神に変身させる特別な魂の化身であり、善なる神として知られる」をあげる。紀元前三千年以前、**古代シュメル**の都市国家の君主は、「自分は神々の種を受けているとか、女神の子供である」と主張しているが、当時の統治者は神聖視されることがなく、神として崇拜もされず供犠も受けてはいなかったが、碑文によると臣下は王たちを神が送ってきた救世主であり、神々の代理であると信じていたことが知れるというS・ラングドン氏の説を引用している。ハンムラビ王は自身をバビロンの太陽一神であると称した。

ヒッタイト人の中では「王は常に太陽として語られる」。**ヘブライ**の世襲的な王は、神によって油で聖別された(イザヤ書 x.1)。ダヴィデ王は塗油式を受けた後、主の精霊がその日以来彼にしっかりと宿ったのである(イザヤ書 xvi.13)。**ギリシア**でもまた聖なる王権は、記録に残る最も初期の宗教と関係を持っている。ホメロス時代の王たちは神と呼ばれた。ホメロス時代の王は神々の子孫であり、司祭であった。そして善き王は「黒い大地に小麦と大麦を成長させ、木々に実をつけさせ、家畜の群れを増やし、海に魚をあふれさせる」。これらすべては今後明らかにしていくが、聖なる王権の持つ特徴的な属性であると述べる。昔の**ローマ**の王権については良く分からないが、『ギリシア・ローマ時代辞典』の中の「供犠王」の説明から、古代の王が司祭の性格を持っていたことは確認されているとする。

(J・フレイザーの「金枝編」はアキアの祭司職に関する規則の研究だが)「森の王」の称号がアキアの祭司に与えられたものであることを出発点に、この位を遡って聖なる司祭一王にまで到達したのが「金枝編」の壮大な理論である。**インド**の聖なる王権の理論については、マヌ法典(12章からなる紀元前2世紀から紀元後2世紀にかけて成立したと考えられる法典で、人類の始祖たるマヌが述べたものとされる。バラモンの特権的身分を強調しており、バラモン中心のカースト制度の維持に貢献)に明確に述べられている。「創造主(ブラフマン)はこの世界を守るために、インドラ(風)、ヤマ(太陽と火)、ヴァルナ(話と富の王)から資質を受け継いだ王を作った。王は、神々の長であるこの三神の資質を受け取っている、賢明さにおいて全生物を上回っている。この地上で誰一人として王を凝視することは出来ない。彼は火であり、風であり、太陽であり、法の王である。彼は

クベラであり、ヴァルナであり、主神インドラである。彼は子供ではあるが、この大地の主は軽視されるべきではない」。また別の章では、「君主は、ソマ（または月）、火、太陽、風とインドラ、富（クベラ）と水（ヴァルナ）の二神、ヤマとこの世の八守護神からなる身体を持っている」。マハー・バーラタでは王はデヴァ＝神と呼ばれ、女王はデヴィー＝女神と呼ばれており、この理論が実際に適用されている。インド最初の記録であるヴェーダ（前期[紀元前 1500 頃～前 1000 頃]に成立した「リグ・ヴェーダ」、後期[前 1000 頃～前 700~600]に成立した「サーマ・ヴェーダ」・「ヤジュル・ヴェーダ」・「アタルバ・ヴェーダ」の 4 種がある）には、聖なる王権の痕跡はないと学者は言っているが、だからと言って王権が知られていなかったことにはならない。ブラーフマナが編まれた時代[およそ紀元前 900～前 500 の間]には、王は既に神聖なる存在であった。**セイロン**（今日のスリランカ）・**マレイ**人はインドの影響を受け同様の考え方である。

日本の古典は、彼らの天皇が太陽とある一柱の神の子孫であることを思い起こさせる（太陽とある一柱の神とは、天照大神[アマテラスオオミカミ]と高皇産靈神[タカミムスビノカミ]のことであろう）。後の例は省くが概ね「神・司祭・太陽」と言ったものである。

これらを述べたあと、著者の意図は地球上のあらゆる所にこういう制度が存在することを探ることではなく、北海から東太平洋に至るまでその制度が広まっていたという事実を立証することであると述べる。そこで、神聖な王という制度が同一起源を持つという仮定にたって証明しようとする（著者は“科学とは、仮説を立て、その仮説に基づいて事実を集め、その結果、仮説が証明されるか、または反証となるかを判定する作業である。科学は仮説を立てることによって進歩するのである”と力説する）。

アイスランドからインドのブラマプトラ州までが一語族（インド＝ヨーロッパ語）であることはよく知られているが、マダガスカルからインドネシアを通り、ハワイやイースター島にかけてはもっと同質的な語族があり、その東部のポリネシア語はかつて存在した中で最も優秀な航海者によって話されている事実は忘れてはならない。この二つの語族が、四千年の間に伝播して地上にある 360 語のうち 250 語になったとしたら、ある一つの宗教が六千年の余裕を持って伝播した場合、それだけ広範に広まるのはずっと容易であろう。何故なら宗教は言語よりずっとすみやかに広範に広がっていったからであると述べる。聖なる王権が全世界に広がっても別に驚くべきことではない。その教義は人間の精神にとって大きな魅力であった。「王は神聖である」という単なる命題だけでは、人々の心の中で王の優越性を獲得するには十分でなかったであろうが、根を深くはるような制度はそれだけ幅広く枝分かれし、全体的な体系を持っているはずである。世界中に恒常的に見られ、本書で常に繰り返されることになるこの教義をまず注目する必要がある、と述べ既に本書に示されている、例えば、王は太陽一神であるという教義があるが、この教義はエジプト、

小アジア、インド、タヒチ、ペルーで見られる。それ故、これは、神聖なる王に関する宗教が持つ起源的な姿であると結論せざるを得ないという。実際それ以外の可能性は有り得ないだろう。というのは、最も初期の神々のほとんどは天の神であり、とりわけ太陽あるいは一般的な天上の光と結び付けられているからである。それ故、インド＝ヨーロッパ母語では、神性を表現するのに、「輝くこと」を意味する“div”という語幹を使っていた。モンゴル語では「空」と「神」を表す語は同じであると言い、「インドの王」・「ペルシャの王」・「エジプトの王」・「シンハリ人の王」・「フランス・ルイ十四世を「太陽王」と呼んだ」等の例を述べ、太陽は王の中に肉体化される最も重要な神であるが、太陽だけでなく月もある。複数の神が化身するという教義に注目すべきで、結局これが重要な鍵となろうと言い、インド・ニュージーランド・エジプトの複数神の化身説の例を述べ、エジプト人とインド人は相互に無関係に神と人間との関係を考えていたことははっきりしている。何故ならば、古代インドの文献では、目や耳や身体他の部分や感覚を神とみなし、あるいは神と結びついているとみなしていたのである。「太陽は眼であり、神々は耳である」という言い方がその一例である。とこの章を結ぶ。

第3章 神よ、王を救い給え！ この章では、今もなお我々は「神よ、王を救い給え！」との祈りを唱えるのは何故なのか？との疑問を解明しようとする。

古来、王は戦いに勝つことが最大の望みであり、人民が君主のために成し得る祈りは、神が彼を勝者とするよう願うだけであった。今も我々は習慣的に同じ祈りを唱えている。古代バクトリアや中近東の人々は、自分たちの王が単に勝つだけでは満足しなかった。彼らは「征服者」「勝利の担い手」「無敵の」といった様々な称号を有する王の存在そのものが勝利をもたらすのだと考えていた。モンゴルでは王の称号には征服者という意味が付与されていた。またインド人は、他のどの民族よりも強く王の属性たる勝利を強調する。彼らは君主に挨拶するのに、「勝者たれ」と声をかける。戦士を僧侶と学者の下に位置づけ、かつ早くから暴力と殺人を公然と批難していた彼らが、この国を代表する、非暴力に徹した使徒たる人物に挨拶するのに、「ガンジーが勝利を得るように」と昔ながらの歓呼の声をあげている。彼らの場合この勝利という語は、我々のものとは別なものを意味するのか？彼らは王の即位の年を、たとえ平和裡に即位したとしても、「勝利の年」と呼んでいる。このことから、勝利という語が彼らには別のことを意味しているのだろうということが分かる。カンボジアの王の即位の日は、やはり「勝利の日」といわれる。この勝利の観念は、明らかに西洋人のものとは別物である。インドには平和的勝利というものがある。皇帝は「棍棒も剣も使わず、道徳法によって海に囲まれた地球を征服する」のである。ここで、仏陀の説話を例にあげ、仏教徒の平和主義が、以前の彼らの好戦的な伝統における勝利を道徳的な勝利へと変えたのであろうと言いつつ、しかし、道徳と関わりを持たぬ

より古いバラモン教典に遡っても、王の即位は「棍棒にも剣にも」よらない勝利であることを知る。聖職授任式の過程で、王はバター油、即ち浄化されたバターを供える。それによって王は「悪魔を打ち破り・・・そうして『安全と保護を受けた時に、聖職に任じられるように』と考えて、勝利を得る」。さらにもう一つの供物をし、それによって悪魔を打ち破り、勝利を得る。第三に、彼は燃える木を掴んで「火よ……」と叫ぶ。こうして彼は悪魔を打ち破っていくのである。その後の段階では、王は模擬戦を行い、次に太陽の回る方向に、「私は気力と活力を授けられた」と言って旋回する。ここで、王が即位に際して勝ち取るべき勝利は、呪術的な争いにおける呪術的な勝利であることが判明したとする。このような争いはバラモン教の書物には「神と悪魔は、供犠の執行時に常に相互に争っているもの」としてよく表わされる。その例として・・・と幾つかの例を述べた後、チベットでは今日でも依然、この儀礼的な勝利の観念が生きているとしてその例をあげる。さらに呪術的争いはインド世界だけに限らないと、バビロニアの神マルドゥクと悪魔との大戦争の例、北欧のフィンランドのカレワラの例をあげ、しかしヨーロッパにおける百年戦争[1337-1452]の時代になるとこのような呪術的な勝利の事例はほとんど見ることは出来ず、今日もそうであると述べ、フランスの王位争いの例をあげる。何故こんなにも一般的に、王は儀礼的な勝利か、または王位に就く以前に一つの勝利を勝ち取らなければならぬと考えたのか？その答えの鍵は、サタパタ（紀元前 800～前 500 年頃書かれたヴェーダの聖典を散文で詳説したサタパタ・ブラーフマナの事）の「彼は太陽と同方向に転輪を回す」という言葉の中に見出せるという。ヴェーダの王はインドラであり、インドラは太陽である。彼が打ち破った悪魔は暗黒を表象していた。太陽が、大地の豊穡のために暗黒に勝つことは、国家の繁栄にとって本質的なことである。それ故王は、太陽一神として勝つのである。国王の勝利が持つ特質は事実、太陽の特質である。太陽の勝利は、セイロン・ジャワ・ローマ・ペルシャ・イランでも見出されるとし、太陽一神＝聖なる王の関係を示す。太陽は無敵となり、征服されない意味となったが、それでは何故無敵なものに対して、その勝利を確かなものにすべき儀礼が行なわれたのか？全ての公の祭典の最後に、我々は神に対し、王を救い給えと祈る。何故なのかと考えた結果、「神が我々の王に勝利を与えるようにと祈る時、我々が言おうとしていることは、自分たち自身の勝利なのである」と考えが及ぶ。次に、では何故こんな回りくどい方法を取るのか？我々は何故「神よ王を救い給え」と歌うのか理解出来ない、と問う。その理由として辿り着いたのは、「その根本的な原因が今や忘れ去られた神学にある」事を発見する。「我々が今もそう唱える原因は習慣の力によるのだ」とし、依然として古代の神学が伝える呪文の、時には意味だけを、時には形だけの繰り返しを余儀なくされていると分析し、こうして「神が王を救う」という言葉は、直接的にか、またはビザンチンの儀礼を経過して、ローマ皇帝あるいはユダの王、ヨアシュの即位式まで遡っていき、他方、王の敵に対して災いを祈願する呪文は、ビザンチンの儀礼が「汝は征服す」という言葉で端的に表現しているテーマを巡って形成される、とする。敵とは？古代においては神々が王

によって人格化されていたように、悪魔もまた代理の人間を持っていた。インドではイニシエーション儀礼を受けていない者はみな悪魔を表象している。儀礼を認められない第四カーストは悪魔を表象、異邦人は悪魔とほぼ同一視され様々な言葉で表象される。悪魔を敗走させる最も簡単な方法は、彼らの代理である人間を殺すことである。これは眼に見えるが、儀礼による追放は可視的でない。古代人は宗教的戦争と世俗的戦争を区別していなかったが、この完全な分離は全く近代的なもので、中世の儀礼では、後の章で見るように、教会の敵は常に王の敵とひとまとめにされ、両者ともしばしば悪魔の力と同一視された。神の敵と王の敵との同一視は、王にも人民にも非常に心地よい教義であり、彼らの基底にある殺害への欲求と、自身が攻撃者であることを不本意だと思うやはり基底にある気持ちとの間にある葛藤を解決する、すばらしい方法を提供した。この両者を同一視する教義は国家的な多くの偽善に正当性を与えている。しかしこの教義も今日においては、避けぬことの出来ぬ葛藤であっても、緩和された形式と制度を争いに課すことになったので、悪行よりもむしろ善行を成したと言えよう、とこの章を結ぶ。

第四章 瘰癧（瘰癧とは、頸部リンパ節の慢性腫脹で、結核性のもの。多くの大小結塊を生じ、初めは疼痛を感じないが、のち化膿して外方に潰破、膿汁を分泌するに至る。）

この章では、王たちが引き起こす奇跡とその力の根源について語る。

歴史家は超自然的なものに生まれつき嫌悪を抱いている。歴史家は奇跡そのものと、奇跡を信ずることとを混同してきた。奇跡を信じる精神も人間の事柄に影響を与え得ないと考える間違いを無意識的に犯してきた。しかし、奇跡を信じる信仰が広く分布し、かつ長年にわたって永続している事実を知る必要があり、この信仰が、王と国家の繁栄にずっと重要な役割を演じてきたことを認識すべきであるという。この信仰は、ここで扱うヨーロッパからインド洋沿岸、さらには太平洋に至るまでの全地域に広がっているといい、多くの事例を述べる。ポリネシア諸島全体を通して、**王または首長は穀物に力を及ぼす**と信じられている。ポリネシアでは、穀物の成長は王に依存しているので、サウという語が同時に王と平和と繁栄を意味している。首長や王の持つ力は、ポリネシア全体でマナと言われる。それ故、 $王 = 神$ という等式が成立し、王は奇跡を行なうことができるのである。

メラネシアにもマナという言葉とその概念が広まっていると述べ、フィジー人、マレイ人の例をあげる。また王たちの持つ超自然的な効力については、インドの文献に沢山書かれているといい、ダナンジャ王の雨降りや、カリンガ王の雨降りの例をあげる。これらは王たちの儀礼やある行為をすることによって神から与えられた成果であるという。

セイロンでも雨降りの事例がある。フィジーの王たちの称号が繁栄を意味するように、セイロンの王の称号も、食物とか繁栄の女神を意味すると言われている。インドの王たちは病人に触れると、神のように病いを治す（マハーバーラタより）。またバビロニア人は、王

の公正さが繁栄の原因になると信じていたと、創世記での記述にふれ、**古代ギリシアの王たちは、食物供給の責任がある**とホメロスがオディッセウスに言わしめている。初期のローマの王たちについては、直接的には知り得ないが、ただ『金枝編』を辿っていけば穀物に与える王の力を想定し得るという。ローマ人が東洋から聖なる王権を持ち帰ったとき、王は食料供給や国中の繁栄に影響力を持っているという信仰を共に持ち帰ったのであったといい、数々の事例をあげる。ローマ皇帝が治療を施した例も知られている。古代ドイツ人もまた王に豊穰性を期待したと、ブルゴニューの王の例をあげるほか、十三世紀のノルウェーの伝説の例もあげる。

我々の中世の王たちは、一方ではドイツの王の後継者たらんとし、他方ではローマ帝国の壮麗さを真似ようとしたが、興味深いことにただ一点、治癒力を除いて両者の奇跡的な力は全く失ってしまったという。フランスとイギリスの王たちは、触れるだけで瘰癧を、しかし瘰癧だけを治すことができた。そのような理由から、この病気は、**King's Evil**（王の疾病）として知られていたといい、シェークスピアの言葉[「王の病」と呼ばれる。瘰癧のことだ。]を引用する。次にフランスの例を長々と述べて、このように、我々が取り扱っている領域の隅々まで、奇跡的な力を授かっている王を発見するといいい、「何故に王は奇跡を行なうのであろうか」とさらに追求する。結論として、「王は神である。さらに言うなら、太陽神である。」と述べ、太陽のエネルギーを根源に置き、次章では、熱と道徳的行為とのアナロジーがギリシア人には無縁なものではなかったことが解明されるであろうと述べ、太陽の如き人物を考え出したことは人類の歴史の中でも最も重要なことの一つであり、それは統治者の発明したものに他ならない。太陽＝人間という教義が君主制に与えた形態の科学的な正当性がいまだ見出せないなら、我々がいまだに理解できぬ心理学的価値があることを示唆しているのである、と結ぶ。

第5章 王の正義 この章では、王の正義の効用とその力の源泉を考察していく。

ホメロスは、理想的な王について語るにあたり、王の臣下の繁栄は彼が正義を行なった結果であることを強調しているが、この場合彼は王が臣下を和合させ、精力的に働かせて繁栄を促すとは考えず、直接自然に対して正義を実行していると考えているという。この正義という語は、ギリシア語の *dikē* であるが、それにはもっと広い意味がある。妥当適切な意味は慣習であるが、神への畏れと共に、正義、法、徳、敬虔等をも表す。ローマ人が東洋から聖なる王権を持ち帰った時、王は繁栄に影響力を持っているという信仰を共にもたらしたが、その繁栄は王の正義に依存するとされた。当然これは、インドやセイロンにもある。「王の正義は雨を調節し、結局は収穫を調節している。」というものである。その逆に「王が正義を行なわなかったり、統治が正しくなかったり、戦争に負けそうになったり、供犠の実践において何らかの不注意を犯したり、王が正統な継承者でなかったとかすれば、大地が豊穰を拒否する」という考えが各地にあると例をあげる。しかし、もし正義を実践する道徳的な王がいたとしたら、彼は絶対に成功することのない王であるとし、実際に偉大な統治者が

聖人であったことは皆無であるが、民衆の意見では、豊作は聖人の治世に依存すると考えられていると言いつつも、「正しき王の下では豊穰に恵まれるという考えに、人々が経験的観察によって到達しない」としたなら、それは演繹法により、人々は何らかの既に認められた教義からその考えを引き出したと考えられるという。それ故ここで、王は神である、とりわけ太陽王であるという筆者の命題に戻り、この命題に、奇跡を起こす力の源泉を求めていこうとする。この力は王の正義と密接に結びついている、力は正義に由来するのであるといい、太陽の持つ特質から王の正義を引き出し得るか試してみようと、インド、エジプト、ギリシアの例をひく。

インドでは、王の持つ奇跡的な力ほどには直接的な証拠はないが、王の正義に関する間接的な証拠はある、とヴェーダの中での言葉から、ヴァルナは自然法と道徳法の二法を維持する天上の神で、それ故「法の神」と称され、また優れて王の性格を持った神で、王にその特質を与える神々の一人であったと述べる。ヴァルナプラガーサと呼ばれる共儀があり、その中で王はヴァルナと同一視されている。それ故に「聖なる王が法の王」という称号を持つのである。ヴァルナの自然界における位置を定めるのは容易ではないが、彼は世界を制御する能力においてはただ太陽だけに結びついているように思えると推測し、また言語学者たちの曖昧な解釈だけだと断りながら、彼の名は天空の意味を持つと示唆されている故に、彼が天や自然道徳的な秩序と関係を持っていることは確かであろうという。サタパタは、ヴァルナを法と秩序と太陽に結び付けて考えている。「正義はこの火であり、真実はあの太陽である。またはむしろ正義はあの太陽であり、真実はこの火である」。

仏教における法輪は、明らかに太陽の象徴である。太陽を法と秩序の維持者とする考えは、シンハリ人の間で「汚れ無き法の太陽」という名で伝わっている。この考えは、インドの土着の部族の中まで浸透している。等の例をあげ、続けてエジプトの太陽神ラーもヴァルナと同じく「審判の神」と称せられ、安定性と権威がその神の特性であった等の例をあげる。プラトンの言葉をあげ、エジプト人同様ギリシア人もまた、太陽(または広く火と関係を持つものの行動)と心との間に関係があると認めていたことが伺え、正義は自然も人間の問題をも統治しているのでであると述べる。

王の正義は、王が太陽であるとの考えからの必然的な帰結である。事実、王を太陽だと想定する目的は、世界と部族に規則性を与えて、土地と人々を実り多きものにするためであった。もし時期を失って太陽が輝いたり、雨が降ったなら、土地は豊かにはならないだろう。同じことが、王の不法な振る舞いにも言えよう。その時には災難に見舞われることになる。王は、儀礼と裁判遂行にあたって、秩序と時間を自ら守るべきであるだけでなく、また太陽の如く、自然と人間に彼の法を遵守させるようにしなければならない。……とかその他の言葉をあげ、古代の先駆者たちは、天候に関する永遠の問題を解決して、人間の生存につきまとう不確かさを全廃しようとしたが、ある程度までなら自然の力を直接コントロールせずに、自己制御と自然の攻撃に対する共同戦線を張ることによってその不確かさを排除することに成功した、と結ぶ。

以上が題名『王権』の第5章までの大雑把な概要であるが、その記述の大半は「王」或いは「神聖なる王」に関する内容で、「王権」に関しては「インドの聖なる王権」、「ギリシアの

聖なる王権]、「ローマの王権」という言葉として数ヶ所の記述しかない。しかもその後は必ず「王」個人の記述となる。この事は「(神聖なる) 王の持つ (数々の) 能力」=「王権」として捉えられている。が、この内には二つの意味があるようである。一つは崇拜される「1人の王」個人の持つ能力(力) そのものと、その「個人の王」の持つ能力(力) を引き継ぐ「王になる権利」である。もともと「王」とは、ある集団のなかでその集団の生存に対して安全と繁栄を保障出来る、あるいは奇跡を期待出来る(特殊な) 能力を持つことが認められ選ばれた、首長とか族長とか長老とか言われる人達から発し、長としてその集団に対する決定権を持ち、それが発達したものが「王権」と見なされるものであろう。

古い時代には、生き残るためには安定した自然の恵みが一番重要であり、その「安定した自然の恵み」は「太陽の恵みから」と認識され、選ばれた人たちは時にオーラを発しており、それらが「火・太陽・神」と表現されたものと思われる。王を太陽だと想定する目的は、世界と部族に規則性を与えて、土地と人々を実り多きものにするためにあつただろう。

それは地域を問わず共通の問題であり、相似かよった認識或いは現象が生ずるのは当然なことと思われる。従って、ホカートが述べる王は単なる「王」ではなく「聖なる王」であり、それ故文献或いは、言い伝えられた口承によって、文学的にかまたは宗教的に証明しなくてはならないものとなる。しかし、集団はいつの世でも、また何処でもそれらを望む。だからその痕跡は残るものである。問題は、(最初に認められた人たちを除き～何故なら実際にその力が認められ選ばれた人たちであるから) 跡を継いだ人たちの能力(力) や、又はその継承そのものを集団に対して認めさせ、納得させる方法であろう。その方法として権威付けの「儀礼」が各種考案され次章からのテーマとなってくるだろう。

【閑話休題】

参考のためネットで調べていたところ、大阪大学福永氏(当時助教授)の「質問のページ」に出会った。専攻以外の学部生も含まれた講義に対する質問だったが、「前方後円墳がある王が亡くなった後も、国が続けられるということが、どう言う観点から言えるのか？」に対して、「王は目に見えない秩序を目に見える形で「物質化」することによって、はじめて王権を維持できる」と解答し、国家形成と儀礼の関係を重視する人類学者のA・M・ホカートは「最初の王は死せる王だった」と述べ、初代の最高有力者の葬送儀礼を成功させることが、継続する王権としての出発点になることを示唆すると、このレベルでの講義で既にホカートの紹介をし、さらに参考図書の紹介をも行なっている。

引用・参考文献

- | | | | | |
|------------|--------------------|--------|------|-------|
| ●王権 | A・M・ホカート | 橋本 和也訳 | 人文書院 | 1986 |
| ●金枝篇 | J・フレイザー | 永橋 卓介訳 | 岩波文庫 | 1971版 |
| ●大嘗祭の宗教的意義 | 埼京震学舎ホームページ | | | |
| ●質問のページ | 大阪大学福永研 ホームページ | | | |
| ●ヴェーダとマヌ法典 | フリー百科事典『Wikipedia』 | | | |